

食物アレルギーの加齢に伴う

耐性獲得に関する検討

出典	栄養・医科学(2186-8506)2巻1号 Page5-16(2013.03) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/2015005243)
著者	上野晋作 他
調査地域	愛知県
調査時期	記載なし
調査対象	高校1年生(16歳) 高校3年生(18歳)
有効回答数	597人
診断方法	自己申告(既往)
有症率	2.2%
男女別有症率	男:2.2%、女:1.7%
調査概要	愛知県内の高校生を対象とし現在の有症率と小児期の食物アレルギー有症率を比較した論文。多くが耐性を獲得し男女差は認められなかった。耐性獲得率は鶏卵に比べ、魚介類や木の実類、穀類は低値であった。

4. アトピー性皮膚炎 詳細レポート

男女別有症率	2012年	2002年	2012年
男全体	12.1%	16.5%	13.7%
小1	13.0%		
小2	12.9%		
小3	12.5%		
小4	11.6%		
小5	11.0%		
小6	11.5%		
女全体	11.4%	18.1%	13.9%
小1	11.7%		
小2	11.0%		
小3	11.4%		
小4	11.0%		
小5	10.4%		
小6	12.7%		

調査概要 西日本 11 県の同一小学校を対象に同一アンケートによるアレルギー疾患の有症率の経年変化を調査した論文。過去の医師の診断に基づく AD の有症率は 11.7%と 2012 年には減少し、年齢での差は認めなかった。

西日本小学児童におけるアレルギー疾患 有症率調査 1992、2002、2012 年の比較

出典 日本小児アレルギー学会誌 (0914-2649) 27 巻 2 号 Page149-169 (2013.06)
(<http://search.jamas.or.jp/link/ui/2014016402>)

著者 西間三馨 他

調査地域 福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、鹿児島県、大分県、宮崎県、山口県、沖縄県、兵庫県、香川県

調査時期 1992年、2002年、2012年

調査対象 小学生 (6~12歳)

依頼数 35327人

回収数(率) 33915人(96.2%)

有効回答数(率) 33902人(96.0%)

診断方法 過去の医師による診察

有症率 1992年: 16.5%

2002年: 13.7%

2012年: 11.7%

学年別有症率	2012年	1992年	2002年
小1	12.4%	18.8%	14.0%
小2	12.0%		
小3	12.0%		
小4	11.3%		
小5	10.7%		
小6	12.1%	15.5%	14.2%

Community validation of the U.K. diagnostic criteria for atopic dermatitis in Japanese elementary schoolchildren.

出典 J Dermatol Sci. 2007 Sep; 47(3): 227-231.
(<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/17544635>)

著者 Saeki H 他

調査地域 2001～2002年：北海道、岩手県、東京都、岐阜県、大阪府、広島県、高知県、福岡県
2004～2005年：東京都、大阪府、福岡県

調査時期 2001～2002年、2004～2005年

調査対象 小学1年生（6～7歳）、小学6年生11～12歳

有効回答数 2001～2002年：16152人
2004～2005年：3849人

診断方法 医師による診断
UK ワーキンググループに基づく日本語質問票

有症率 2001～2002年：17.3%
2004～2005年：15.4%

調査概要 2001～2002年に8地域（北海道、岩手、東京、岐阜、大阪、広島、高知、福岡）、2004～2005年に3地域（東京、大阪、福岡）の小学校1年生と6年生に対し、事前にUK ワーキンググループに基づく質問票を送付し、その後皮膚科医の診察を行った。質問票の感度は71.8%、特異度は89.3%であり、将来的に疫学調査において有用となるかもしれない。

Comparison of prevalence of atopic dermatitis in Japanese elementary schoolchildren between 2001/2002 and 2007/2008.

出典 J Dermatol. 2009 Sep; 36(9): 512-514.
(<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/19712280>)

著者 Saeki H 他

調査地域 北海道、東京都、大阪府、福岡

調査時期 2001～2002年、2007～2008年

調査対象 小学生（6～12歳）

依頼数 2001～2002年：12292人
2007～2008年：7367人

診断方法 UK ワーキンググループに基づく日本語質問票

有症率 2001～2002年：12.7%
2007～2008年：12.1%

学年別有症率 2007～2008年 小学校1-3年生：12.6%
小学校4-6年生：11.4%

男女別有症率 2007～2008年 男児：12.0%
女児：12.1%

調査概要 国外ではUK ワーキンググループに基づく質問票は有病率の研究に有用であると評価されている。我が国でも2004～2005年に行われた小学生を対象とした研究では、本質問票でのアトピー性皮膚炎の有病率の見積もりができる可能性が示唆された。今回4地域（北海道、東京、大阪、福岡）において、2001～2002年と2007～2008年の日本小学生のアトピー性皮膚炎の有病率の推移を質問票のみで評価したところ、それぞれ12.7%、12.1%であり有意な変化は認めなかった。

調査概要

2007～2008年に旭川医科大学と近畿大学職員（20～60歳代）を対象に行った健康診断にて、皮膚科医による診察を行ったところ、アトピー性皮膚炎の有病率は6.1%（男4.9%、女7.3%）であった。同時にUKワーキンググループに基づく質問票も配布し、感度は68.8%、特異度93.5%であり、将来的に疫学調査において有用となるかもしれない。

Prevalence of atopic dermatitis in Japanese adults and community validation of the U.K. diagnostic criteria.

出典 J Dermatol Sci. 2009 Aug; 55(2): 140-141.
(<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/19427173>)

著者 Saeki H 他

調査地域 北海道、大阪府

調査時期 2007～2008年

調査対象 20歳以上

依頼数 2137人

診断方法 医師による診断

有症率	20代 :	10.5%
	30代 :	7.8%
	40代 :	3.9%
	50～60代 :	2.5%

男女別有症率	男性	女性	
	全体 :	4.9%	7.3%
	20代 :	9.0%	10.9%
	30代 :	7.7%	7.8%
	40代 :	4.0%	3.6%
	50～60代 :	2.1%	3.2%

大学別有症率	旭川医科大学	近畿大学	
	20代 :	11.2%	6.8%
	30代 :	8.3%	6.8%
	40代 :	2.5%	5.7%
	50～60代 :	2.6%	2.4%

Prevalence of atopic dermatitis determined by
clinical examination in Japanese adults.

出典 J Dermatol 2006 Nov; 33(11): 817-819.
(<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/17074002>)

著者 Saeki H 他

調査地域 東京都

調査時期 2004 年

調査対象 20~69 歳

有効回答数 2123 人

診断方法 医師による診察

有症率
20代: 9.8%
30代: 8.7%
40代: 4.4%
50代: 2.6%
60代: 6.9%

男女別有症率	男	女
20代:	5.7%	13.1%
30代:	6.9%	11.5%
40代:	4.4%	4.3%
50代:	1.5%	2.6%
60代:	5.1%	6.9%

調査概要 東京大学で健診を行った成人を対象に実施した。日本で初めての一般成人集団を対象に有症率をだした論文。有症率は約7%で、女性のほうが男性より有症率が高かった。年代が上がると有症率も低かった。

北海道におけるアトピー性疾患に関する疫学調査

出典 小児保健研究 (0037-4113) 63 巻 4 号 Page412-420 (2004. 07)
(<http://search.jamas.or.jp/link/ui/2004299119>)

著者 大見広規 他

調査地域 北海道

調査時期 2004 年

調査対象 3 歳

依頼数 7735 人

回収率 86.20%

有効回答数 6667 人

診断方法 医師による診断

有症率 11.80%

調査概要 北海道の市町村において3歳児検診を受診した児を対象にアレルギー疾患の有病率を調査した論文。3歳時点でアトピー性皮膚炎の有症率は11.8%、その中でも過去にアトピー性皮膚炎と診断されて3歳時も症状が持続していた児は66.6%であった。

男女別有症率	男		
健診	3ヶ月: 3.6%	1歳9ヶ月: 4.2%	3歳: 12.3%
保育園	0歳: 22.2%	1歳: 20.5%	2歳: 18.5%
	3歳: 8.8%	4歳: 14.7%	5歳: 13.8%
	小学生	小1: 14.62%	小2: 16.39%
	小4: 9.66%	小5: 10.16%	小6: 11.51%
中学生	中1: 5.38%	中2: 5.00%	中3: 3.86%
高校生	高1: 3.85%	高2: 7.29%	高3: 11.22%
大学生	4.2-8.2% (1995~2003年)		
	女		
健診	3ヶ月: 0.85%	1歳9ヶ月: 11.2%	3歳: 13.3%
保育園	0歳: 0.0%	1歳: 13.9%	2歳: 16.1%
	3歳: 18.1%	4歳: 17.2%	5歳: 24.5%
	小学生	小1: 9.65%	小2: 11.61%
	小4: 7.79%	小5: 10.22%	小6: 9.69%
中学生	中1: 7.11%	中2: 11.32%	中3: 8.57%
高校生	高1: 5.51%	高2: 7.53%	高3: 5.37%
大学生	6.0-10.0% (1995~2003年)		

調査概要 2004年長崎県での小児全年齢毎 (0~18歳) (n=6468)の皮膚科医に診断されたAD有病率の横断調査。幼児期は15%前後、小学校は10%前後、中高生が7%前後と成長とともに有病率は低下していた。

長崎県下におけるアトピー性皮膚炎の疫学調査

出典 皮膚の科学(1347-1813)3巻 Suppl.4 Page13-18(2004.12)
(<http://search.jamas.or.jp/link/ui/2006000839>)

著者 竹内基 他

調査地域 長崎県

調査時期 2004年

調査対象 健診 (3ヶ月、1歳9ヶ月、3歳)
保育園児 (0~5歳)
小学生 (7~12歳)
中学生 (13~15歳)
高校生 (16~18歳)

回収数および有効回答数

健診	3ヶ月: 252人	1歳9ヶ月: 218人	3歳: 203人
保育園児	0歳: 26人	1歳: 80人	2歳: 111人
	3歳: 131人	4歳: 133人	5歳: 107人
	小学生	小1: 481人	小2: 462人
	小4: 534人	小5: 481人	小6: 510人
中学生	中1: 383人	中2: 319人	中3: 452人
高校生	高1: 361人	高2: 378人	高3: 354人

診断方法 医師による診察

有症率	健診		
	3ヶ月: 3.6%	1歳9ヶ月: 14.2%	3歳: 12.3%
保育園	0歳: 15.4%	1歳: 17.9%	2歳: 18.0%
	3歳: 13.7%	4歳: 16.5%	5歳: 19.6%
	小学生	小1: 12.27%	小2: 14.07%
	小4: 8.80%	小5: 10.19%	小6: 10.59%
中学生	中1: 6.27%	中2: 8.15%	中3: 6.42%
高校生	高1: 4.43%	高2: 7.41%	高3: 8.76%
大学生	4.9-7.9% (1995~2003年)		

【広島県地域保健対策協議会調査研究報告

(平成 14 年度)】

広島県におけるアトピー性皮膚炎患者に関する

実態調査(第 3 報) 年齢別有症率調査

出典	広島医学(0367-5904)56巻12号 Page790-795(2003.12) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/2004118866)
著者	秀道広 他
調査地域	広島県
調査時期	2002 年
調査対象	4ヶ月、7歳、12歳、18歳
依頼数	4ヶ月：439人、7歳：1089人、12歳：1055人、18歳：2590人
回収率	100%
有効回答率	100%
診断方法	医師による診察
有症率	4ヶ月：11.6% 7歳：10.9% 12歳：13.3% 18歳：9.2%
調査概要	広島市安佐南区の4ヶ月児、郡部の小学1年生、6年生、広島大学新入生のAD疫学調査をした。広島県全体では、全年代を通じて有症率は10%程度で、年齢増加による有症率の低下はみられなかった。

乳児を除く小児アトピー性皮膚炎の疫学

(頻度と要因)

出典	皮膚の科学(1347-1813)3巻Suppl.4 Page5-12(2004.12) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/2006000838)
著者	占部 和敬
調査地域	北海道、岩手県、東京都、大阪府、岐阜県、高知県、広島県、福岡県
調査時期	2000~2002 年
調査対象	小学1年生、小学6年生
依頼数	2800 人
診断方法	医師による診断
有症率	7~15%
調査概要	小学1、6年生を対象に全国8か所(北海道、岩手、東京、大阪、岐阜、高知、広島、福岡)でアトピー性皮膚炎の有病率を調査した論文。有病率は7%から15%で全体としては11%だった。福岡、大阪で高く、岩手、高知で低かった。

3歳児健診よりみた乳幼児アレルギー疾患の疫学

出典 日本小児科学会雑誌(0001-6543)108巻11号 Page1358-1365(2004.11)
(<http://search.jamas.or.jp/link/ui/2005067690>)

著者 楠 隆 他

調査地域 京都府

調査時期 2001~2002年

調査対象 3歳

依頼数 2594人

回収数 1054人

有効回答数 1014人

診断方法 93年厚生省アレルギー総合研究疫学班作成の学童調査票

有症率 8.50%

調査概要 3歳児健診を受診した一般小児を対象としてADの疫学調査を実施した論文。
AD現症率・既往率は各々3.0%・5.5%。AD既往者は非既往者に比べ
3歳時点での喘息の頻度が1.7倍(21.4% vs 12.3%)。春生まれはAD罹患率
が低い傾向。

Prevalence of atopic dermatitis in Japanese elementary schoolchildren.

出典 Br J Dermatol 2005 Jan; 152(1): 110-114.
(<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/15656810>)

著者 Saeki H 他

調査地域 北海道、岩手県、東京都、岐阜県、大阪府、広島県、高知県、福岡県

調査時期 2001年

調査対象 小学1年生(6~7歳) 小学6年生(11~12歳)

依頼数 29482人

有効回答数 23719人

有効回答率 80.4%

診断方法 医師による診察

有症率 11.2%

地域別有症率 北海道: 11.0%

岩手: 7.4%

東京: 10.2%

岐阜: 12.5%

大阪: 13.6%

広島: 11.2%

高知: 7.8%

福岡: 15.0%

学年別有症率 1年生: 11.8%、6年生: 10.5%

男女別有症率 男児: 11.4%、女児: 11.0%

居住地区別有症率 都市部: 10.9%、郊外: 11.5%

調査概要 8都道府県における小学生のアトピー性皮膚炎の有病率を、皮膚科医の診察に
基づいて調査した論文。全体として有病率は11.2%で、その74%が軽症だった。
1年生は6年生よりもわずかに有病率が高かった。

【広島県地域保健対策協議会調査研究報告】

皮膚疾患専門委員会

広島県におけるアトピー性皮膚炎患者に関する

実態調査(第2報) 年齢別有症率調査

出典	広島医学(0367-5904)55巻9号 Page753-760(2002.09) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/2003161454)
著者	秀 道広 他
調査地域	広島県
調査時期	2001年
調査対象	1歳6ヶ月、3歳、7歳、12歳
依頼数	1歳6ヶ月：938人、3歳：842人、7歳：596人、12歳：570人
回収率	幼児：96%、学童：97.7%
有効回答率	100%
診断方法	医師による診察
有症率	1歳6ヶ月： 9.0% 3歳： 10.6% 7歳： 10.9% 12歳： 10.9%
調査概要	広島県内の1歳6ヶ月、3歳、小学1年生、小学6年生のAD直接健診をした。幼児では大部分が軽症例であった。学童では女児に多い傾向があった。併せて行ったアンケート調査は比較的信頼のおけるものだった。

小学校健診による全国規模の アトピー性皮膚炎有病率調査結果

出典	日本皮膚アレルギー学会雑誌(0919-679X)13巻4号 Page180-186(2005.12) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/2006162072)
著者	佐伯秀久
調査地域	北海道、岩手県、東京都、岐阜県、大阪府、広島県、高知県、福岡県
調査時期	2001~2002年
調査対象	7歳、12歳
依頼数	23719人
回収率	100%
有効回答率	100%
診断方法	医師による診察
有症率	7.4~15%
調査概要	小学校健診による全国規模の有病率調査を実施した。有病率は地区別にみると7.4%から15.0%の範囲にあり全体としては11.2%であった。男女別、都市郊外別では有病率に有意差はみられなかった。

広島県におけるアトピー性皮膚炎患者
に関する実態調査(第1報)
患者数の全県調査のための
予備調査及び健診とアンケート調査の検討

出典 広島医学(0367-5904)54巻12号 Page1024-1029(2001.12)
(<http://search.jamas.or.jp/link/ui/2002161891>)

著者 山本昇壯 他

調査地域 広島県

調査時期 2000年

調査対象 7歳~12歳

依頼数 511人
回収率 98%
有効回答率 100%

診断方法 医師による診察
UKWPに基づく日本語質問票

有症率 検診: 15.5%
調査票: 16.6%

調査概要 AD患者の有症率調査のための予備調査をした。専門医診察による有症率は15.5%であった。調査票では16.6%であった。調査票では中等症以上に限定した方が、また高学年の児童の方が特異性が高かった。

Incidence of atopic dermatitis in nursery school children-a follow-up study from 2001 to 2004, Kyushu University Ishigaki Atopic Dermatitis Study (KIDS).

出典 European Journal of Dermatology 2006 Jul-Aug; 16(4): 416-419.
(<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/16935801>)

著者 Fukiwake N 他

調査地域 沖縄県

調査時期 2001~2004年

調査対象 5歳以下

依頼数 2001年: 631人
2002年: 836人
2003年: 844人
2004年: 764人

診断方法 医師による診察

有症率 2001年: 6.2%
2002年: 6.3%
2003年: 11.0%
2004年: 3.7%

男女別有症率	男	女
2001年	5.6%	6.9%
2002年	5.2%	7.7%
2003年	9.7%	12.6%
2004年	3.6%	3.7%

調査概要 2001年から2004年まで石垣島の幼稚園児に対して横断的に調査を行った。アトピー性皮膚炎は医師による診断であるが、男児と女児にアトピー性皮膚炎罹患率の差は認められなかった。

【アレルギーマーチの今日的考え方 (pros and cons)】

小児アトピー性皮膚炎の長期予後

出典	アレルギー・免疫(1344-6932)11巻6号 Page786-792(2004.05) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/2004269612)
著者	古江増隆
調査地域	北海道、岩手県、東京都、千葉県、岐阜県、大阪府、広島県、高知県、福岡県
調査時期	2000～2002年
調査対象	生後4か月、1歳半、3歳、小学1年生、小学6年生、大学1年生
依頼数	記載なし
診断方法	医師による診察
有症率	生後4か月： 12.8% 1歳半： 9.8% 3歳： 13.2% 小学1年生： 11.8% 小学6年生： 10.6% 大学1年生： 8.2%
調査概要	2000～2002年に厚生労働省研究班検診によるアトピー性皮膚炎の有症率は4か月児:12.8%、1歳半児:9.8%、3歳児:13.2%、小学1年生:11.8%、小学6年生:10.6%、大学1年生:8.2%であり、3歳時にピークを認めた。全体像としては加齢と共に警戒する傾向がある。生後4か月時までに発症したADの多くは1歳半までに治癒するケースが多い。一方で生後4か月以降に発症するケースも多いため全体として3歳時あたりが有病率のピークとなる。その他に再発例や10代後半～20歳以上になってから初発してくる症例もいる。

乳幼児アトピー性皮膚炎の疫学(頻度と要因)

出典	皮膚の科学(1347-1813)3巻Suppl.4 Page1-4(2004.12) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/2005114463)
著者	柴田瑠美子
調査地域	北海道札幌市、岩手県盛岡市、千葉県、岐阜県、大阪府、広島県、高知県、福岡県
調査時期	2002年
調査対象	4ヶ月、1歳6ヶ月、3歳
依頼数	4ヶ月：2711人、1歳6ヶ月：6424人、3歳：511人
回収率	100%
有効回答率	100%
診断方法	医師による診察
有症率	4ヶ月： 12.8% 1歳6ヶ月： 9.8% 3歳： 13.2%
調査概要	全国実態調査(H14年度)ではAD有症率がH4年の調査より1.6-1.8倍増加していた。乳幼児のADの要因として重症例での食物アレルギー関与、ダニなど多種アレルギー早期監査、秋冬の出生月があげられた。

ISAAC(International Study of Asthma and Allergies in Childhood)

第 I 相試験における小児アレルギー疾患の有症率

出典 日本小児アレルギー学会誌(0914-2649)16巻3号 Page207-220(2002.08)
(<http://search.jamas.or.jp/link/ui/2003040155>)

著者 西間三馨 他

調査地域 福岡県

調査時期 1995年

調査対象 6~7歳、13~14歳

依頼数 6~7歳:2901人、 13~14歳:2831人
回収率 6~7歳:91.4%、 13~14歳:94.2%
有効回答率 100%

診断方法 ISAAC質問票

有症率 6~7歳: 21.3%
13~14歳: 13.5%

調査概要 ISAACの第I相試験の日本のセンターの結果を報告した。
ビデオ調査(中学生のみ)と質問紙法でADの有症率は6-7歳で21.3%、
13-14歳で13.5%であった。

Month of birth, atopic disease,
and atopic sensitization.

出典 J Investig Allergol Clin Immunol. 2001; 11(3): 183-187.
(<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/11831451>)

著者 Saitoh Y 他

調査地域 和歌山県日高市

調査時期 1997年

調査対象 12~13歳

依頼数 755人

診断方法 ISAACの質問票

有症率 28.3%

調査概要 1997年に和歌山県日高地方の中学生(12~13歳)を対象に、ISAACの質問票に基づいて学校医が喘息、アトピー性皮膚炎、アレルギー性結膜炎の診断をし、生まれた月による各疾患の有症率、総IgE値、特異的IgE値の違いを調査した。アトピー性皮膚炎の有症率は28.3%であり、生まれた月による有症率の差は無かった。

調査概要

虎の門病院で健診を行った成人を対象に実施した。日本で初めて成人 AD の有症率を the U.K. Working Party の診断基準を用いて報告した論文。都心に住む成人 AD の年間有病率は 3.0%であり、性別・年齢別での統計学的有意差は認めなかった。

Prevalence of atopic dermatitis
in Japanese adults.

出典 Br J Dermatol 2003 Jan; 148(1): 117-121.
(<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/12534604>)

著者 Muto T 他

調査地域 東京

調査時期 1997~1998 年

調査対象 30 歳以上

依頼数 12193 人

回収数 (率) 10826 人 (88.8%)

有効回答数 (率) 10762 人 (88.2%)

診断方法 UK ワーキンググループに基づく日本語質問表

有症率	<時点有病率>	<過去1年の有病率>	<生涯有病率>
30代:	3.5%	3.8%	4.3%
40代:	3.1%	3.2%	3.3%
50代:	2.6%	2.9%	3.1%
60以上:	2.6%	2.7%	2.9%
男女別有症率	男性 <時点有病率>	<過去1年の有病率>	<生涯有病率>
30代:	3.6%	3.8%	4.2%
40代:	2.9%	3.0%	3.2%
50代:	2.4%	2.6%	2.8%
60以上:	3.0%	3.0%	3.0%
	女性 <時点有病率>	<過去1年の有病率>	<生涯有病率>
30代:	3.1%	3.5%	4.4%
40代:	3.9%	4.0%	4.0%
50代:	3.2%	3.4%	3.9%
60以上:	1.9%	2.2%	2.9%

アレルギー疾患の疫学調査
アトピー性皮膚炎は減少している・
姫路市の小学新入生調査から

出典	日本小児アレルギー学会誌(0914-2649)28巻1号 Page50-57(2014.03) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/2014224004)
著者	黒坂文武 他
調査地域	兵庫県
調査時期	1995～2010年
調査対象	7歳
依頼数	500人
回収率	99%
有効回答率	100%
診断方法	ATS-DLD問診票
有症率	9.40%
調査概要	姫路市での調査ではAD有症率が9.4%と平成7年の17.5%よりも低下していた。その要因としては絨毯の減少、畳の減少と構造の変化による家屋におけるダニの減少が関与していると考えられた。

中学生のアトピー性皮膚炎の調査

出典	西日本皮膚科(0386-9784)58巻5号 Page825-828(1996.10) (http://search.jamas.or.jp/link/ui/1997059388)
著者	加藤哲子 他
調査地域	山形県
調査時期	1995年
調査対象	中学生
依頼数	記載なし
診断方法	医師による診察
有症率	9.2%
学年別有症率	中学1年生:13.1% 中学2年生:9.6% 中学3年生:5.0%
調査概要	1995年に山形市内の中学校において中学1～3年生を対象にアトピー性皮膚炎(AD)の有無を医師の診察によって調査したところ、有症率は9.2%であった。中学1年生が13.1%、中学2年生9.6%、中学3年生5.0%と低下傾向を認めた。

Prevalence of childhood and adolescent atopic dermatitis in a Japanese population
: comparison with the disease frequency
examined 20 years ago.

出典 Acta Derm Venereol. 1998 Jul; 78(4): 293-294.
(<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/9689299>)

著者 Sugiura H 他

調査地域 滋賀県大津市

調査時期 1994~1996年

調査対象 5~18歳

依頼数 5~6歳: 994人
7~9歳: 1240人
10~12歳: 1152人
13~15歳: 1670人
16~18歳: 2159人

診断方法 医師による診断
有病率 5~6歳: 24%
7~9歳: 19%
10~12歳: 15%
13~15歳: 14%
16~18歳: 11%

調査概要 1994~1996年に滋賀県大津市の5~18歳のアトピー性皮膚炎の有病率を、健診時の医師の診断に基づいて調査した。5~6歳: 24%、7~9歳: 19%、10~12歳: 15%、13~15歳: 14%、16~18歳: 11%であり、年齢が上がるとともに有病率は低下していた。

学童期及び青年期アトピー性皮膚炎の有病率

出典 皮膚科の臨床(0018-1404)39巻11号 Page1669-1671(1997.10)
(<http://search.jamas.or.jp/link/ui/1998062225>)

著者 杉浦久嗣 他

調査地域 滋賀県

調査時期 1994~1996年

調査対象 5~18歳

依頼数 7215人
回収率 100%
有効回答率 100%

診断方法 医師による診察

有病率 5~6歳: 24%
7~9歳: 19%
10~12歳: 15%
13~15歳: 14%
16~18歳: 11%

調査概要 大津市居住の幼稚園児、小学生、中学生及び高校生 7215名を診察し、ADの有病率を調べた。5~6歳児 24%、7~9歳児 19%、10~12歳児 15%、13~15歳児 14%、16~18歳 11%であった。

男女別有症率	男	女
3-5 歳 :	11.9%	12.3%
6-7 歳 :	7.3%	10.7%
8-9 歳 :	13.1%	14.3%
10-11 歳 :	17.3%	13.4%
12-13 歳 :	9.0%	9.4%
14-15 歳 :	6.6%	7.0%

調査概要 青森県弘前市内の幼稚園、小中学校の定期健康診断での医師による有症率調査。男女ともに6-7歳が低く、10-11歳でピークとなりその後下降していた。アトピー性皮膚炎児では喘息の合併が多かった。

学校定期健康診断における アトピー性皮膚炎の調査

出典 西日本皮膚科(0386-9784)56巻6号 Page1187-1191(1994.12)
(<http://search.jamas.or.jp/link/ui/1995114632>)

著者 木村有子 他

調査地域 青森県

調査時期 1993年

調査対象 3~15歳

依頼数 1470人

回収数(率) 1470人(100%)

有効回答数(率) 1470人(100%)

診断方法 医師による診察

有症率 10.5%

年齢別有症率 3-5歳 : 12.1%
6-7歳 : 9.0%
8-9歳 : 13.7%
10-11歳 : 15.1%
12-13歳 : 9.2%
14-15歳 : 6.8%

調査概要

1993年に京都府の小中学生（7～15歳）を対象に、出生月とアレルギー疾患との関連を調べるために質問票による調査を行った。アトピー性皮膚炎は秋が最も多く7.5%、春が最も少なく5.5%であった。秋に生まれることが乾燥肌など皮膚に何らかの影響を与え、アトピー性皮膚炎の発症につながる、非アトピー要因であるかもしれない。

Month of birth and prevalence of atopic dermatitis in schoolchildren : Dry skin in early infancy as a possible etiologic factor.

出典 J Allergy Clin Immunol 1999 Jun; 103(6): 1148-1152
(<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/10359898>)

著者 Kusunoki T 他

調査地域 京都府

調査時期 1993年

調査対象 7～15歳

依頼数 56108人

回収数(率) 50086人(89.3%)

有効回答数(率) 33725人(67.3%)

診断方法 ISAACに基づいた質問票を使用
ADは9つの質問のうち、3つ以上を伴う慢性湿疹と定義

生まれ月別有症率

1月生まれ	: 7%
2月生まれ	: 6.5%
3月生まれ	: 5.9%
4月生まれ	: 5.5%
5月生まれ	: 5.2%
6月生まれ	: 5.7%
7月生まれ	: 6.0%
8月生まれ	: 7.1%
9月生まれ	: 7.1%
10月生まれ	: 7.5%
11月生まれ	: 7.6%
12月生まれ	: 7.4%

小学1年生の学童が有するアトピー性皮膚炎を
含めた皮膚病変の5年後の予後調査
： 広島県安佐地区での検討

出典 日本医師会雑誌(0021-4493)135巻1号 Page97-103(2006.04)
(<http://search.jamas.or.jp/link/ui/2006185208>)

著者 岡野伸二 他

調査地域 広島県

調査時期 1992～1997年、1997～2002年

調査対象 1992～1997年：小学1年生
1997～2002年：小学6年生

有効回答数 1992～1997年：1327人
1997～2002年：1167人

診断方法 医師による診察

有症率 1992～1997年：13.6%
1997～2002年：9.2%

男女別有症率 1992～1997年：男13.6% 女13.7%
1997～2002年：男9.3% 女9.1%

調査概要 広島県にて1992～1997年にその年の1年生を皮膚科医が診察し、その児童
たちが小学校6年生になった1997～2002年に再度診察を行うことで、
アトピー性皮膚炎の有病率とその経時的変化を解析した。アトピー性皮膚炎
の有病率は小学校1年生は13.6%であったが、小学校6年生では9.2%に減少
していた。

A 幼稚園におけるアトピー性皮膚炎の検診

出典 小児保健研究(0037-4113)53巻6号 Page835-841(1994.11)
(<http://search.jamas.or.jp/link/ui/1995110544>)

著者 浅野みどり 他

調査地域 名古屋

調査時期 1992年

調査対象 3～6歳

依頼数 250人
回収数 250人
有効回答数 250人

診断方法 医師による診察

有症率 22%

調査概要 名古屋市A幼稚園児250名を対象に1992年10月にアレルギー専門医による
アトピー性皮膚炎(AD)検診を行い、有症率を調査した論文。有症率は22%、
両親にAD既往がある児や、集合住宅、木造以外の住宅の居住児にAD有症率
高かったが、食生活との関連は見られなかった。

男女別有症率	男	女
全体 :	15.8%	18.6%
小学1~3年生 :	21.3%	27.3%
小学4~6年生 :	20.5%	24.4%
中学1~3年生 :	15.2%	17.0%
高校1~3年生 :	4%	4.4%

調査概要 静岡県の小学校1年生~高校3年生に対して皮膚科医による健診を行った。全体の有病率は17.2%であった。小学校では20%台であった有病率も、学年が進むにつれて漸減していき、高校生では4%台にまで減少した。

アンケート調査にみられた静岡県下の 学童・生徒のアトピー性皮膚炎 (第1報) アトピー性皮膚炎の有病率

出典 日本皮膚科学会雑誌(0021-499X)104巻2号 Page89-97(1994.02)
(<http://search.jamas.or.jp/link/ui/1994166885>)

著者 宇佐神治子 他

調査地域 静岡県

調査時期 1990年

調査対象 小学1年生~高校3年生

有効回答数 1095人 (小学1~3年生:259人
小学4~6年生:254人
中学1~3年生:369人
高校1~3年生:213人)

診断方法 医師による診察

有症率 17.2%

学年別有症率 小学1~3年生:24.3%
小学4~6年生:22.4%
中学1~3年生:16.0%
高校1~3年生:4.2%